

上智大学は質素な大学だが、研究室が快適である。研究室がよいと、そこで過ごす時間が長くなり、学生は教授陣にアクセスしやすくなるので、大学本来の対話と討議による教育も実りやすい。そのように無駄がなく、かつ本質において妥協しない点だ。この大学の好きなどころだ。

あすへの話題



研究室で長時間過ごしがちになるので、息抜きにさまざま催しを観に行

く。芸術も学問も、時代の息吹を敏感に取り込むものであるから、研究室で考えていたことと共振する精神の鼓動に出会い、勇気づけられることがある。

森下洋子の舞「シンデレラ」を見た。夫の清水哲太郎が演出・振り付け、王子役。美しい娘が継母の意地悪に耐え、魔法使いの配慮でお城の舞踏会に行く

上智大学教授 猪口 邦子

和解を舞う人

と、継母の娘たちをさしおいて妃に選ばれる。よい生活は最大の復讐、という意味での一種の復讐物語であり、善対悪の単純な構図の童話として知られる。清水・森下のバレエは、それを和解と人間性(ユマニテ)の表現へと昇華した。

森下の舞は、女性美とは繊細にして敏感な精神に始まり、共感する力と絶望しない力によって完成することを伝える。その要素は、裁かれそうになる継母と娘たちを救済し、和解する人間力につながっていく。

森下の繊細な精神性を際立たせる演出として、継母と娘役には体格の大きな男性が扮した。閉幕後に楽屋を訪れると、「継母役は中国の男性なんです」と開口一番に告げてくれた。

シンデレラが継母と和解する童話の奥に、日中和解へ思いがひそやかに織り込まれていたのであろうか。中国での公演を願いたい。